

『星空の契約結婚 ― 牡羊座の旦那様 アリエス編 ―』

序章「召喚 ― 運命の始まり」

職場を出ると、あたりは真っ暗だった。今日はいつもより帰るのが遅くなった。

駅からの道すがら、側溝のそばで傷ついた白い蛇を見つけた。こんな住宅街の片隅に蛇がいるなんて――不思議に思いながらも放っておけず、ハンカチでそっと包み、公園の茂みに移してやる。

「もう大丈夫だよ」

そう声をかけた瞬間、右手の甲が熱を放った。見れば、蛇が円環を描くような紋様が、皮

膚の下から浮かび上がるように輝いている。驚く間もなく、足元のアスファルトが消えた。世界が星屑の渦に変わり、身体がふわりと浮く。

気がつくと、そこは天空だった。

足元は透きとおる星空の床。見上げるほどの柱が並び、どこまでも続く回廊の先に、十二の宮殿がそびえている。呆然とするあなたの前で、あの白蛇が淡く発光しながら人の姿をとった。銀の髪に、どこか人を食ったような笑みを浮かべた青年——彼はあなたに向き直ると、芝居がかった仕草で一礼した。

「やあ、助けてくれてありがとう。僕はオフィ。元・蛇遣い座の神——って言っても、今は力を奪われてこんな姿だけだね」

銀の髪を揺らし、彼はこともなげに続ける。

「君は僕の契約者だ。十二星座の神々のうち、誰かひとりと『真実の恋』を結んでほしい。

そうすれば僕は力を取り戻せる」

あなたは言葉を失った。神様。契約。真実の恋。あまりにも突飛な話に、頭が追いつかない。

「……恋？ 私が？ 神様と？」

「そう。ロマンチックだろう？」

「無理です。私、普通の社会人ですよ。残業して帰ってただけの」

「大丈夫、星紋が導いてくれる。君にだってできるさ」

「星紋って——？」

「右手を見てごらん」

言われたとおりに右手を見ると、手の甲に紋章がピカピカと光っていた。

（なにこれ——、こんなの絶対おかしい）

社会人としての直感が、この人にはかかわるなと告げていた。

そんなあなたを気にも留めず、オフィはこともなげに言う。

「期限は一年。一年の間に星の神様と恋できなければ——」

「できなければ？」

「君は記憶を失って地上に戻る。そして僕は永久にあの傷だらけの蛇のままになっていることになる。責任重大だろう？」

「責任、って……」

拒否権はなかった。右手の星紋がすでに、あなたをこの契約に縛っている。

「どの神様と、どうやって……？」

「それは星紋が導くよ。たとえば——」

オフィがあなたの右手を持ち上げると、星紋がひとりでに方角を示す。その先は、十二宮の最初——牡羊宮だった。

「おや。君の赤い糸は、牡羊座の彼とつながっているみたいだね」

彼は目を細めると、あなたの手を引いた。

「いこうか、天空の星の姫。赤い雄羊の神のもとへ」

牡羊宮の門をくぐった先は、広大な鍛錬場だった。空気は熱をはらみ、壁には無数の武器がかけられている。そして中央に、ひとりの男が立っていた。

逆立った燃えるような赤髪。紅い瞳。肩に担がれた巨大な戦斧。赤と金の戦鎧が、かすかな風にマントをはためかせている。

「お前が契約者か」

低い声が、空間を震わせた。

「俺はアリエス。牡羊座の守護神にして戦神だ。さあ、立て」

どん、と足元に木剣が落とされる。

「俺と戦え」

それが、戦神アリエスの第一声だった。契約結婚だの、真実の恋だの——彼にとってはすべて瑣末事らしい。恋愛など「弱者のすること」と切り捨て、あなたを「力の増幅装置」として扱う。

「——え」

あなたは言葉を失った。戦う？ 私？ 運動だって学生時代以来だし、そもそも神様と戦うって何。どう考えても命がいくつあっても足りない。あなたは助けを求めるように、背後に立つオフィを振り返った。

「あの、オフィさん、これ——」

「ああ、大丈夫。そのための星紋だよ」

オフィはこともなげに言う、あなたの右手をそっと持ち上げた。星紋がかすかに輝き、あなたの身体をあたたかな光が包み込む。

「星紋はね、君と契約した神の力を増幅するだけじゃない。ほんの少しだけ、君にも戦う力を与えてくれるんだ。僕がサポートするから、安心して」

「戦う力をつて……でも、私——」

「君ならできるよ。星紋が導いたんだ。君は彼と——ちゃんと向き合える」

オフィの声は穏やかだったが、その目はどこか真剣で、反論を許さない雰囲気があった。あなたは観念して、目の前の戦神に向き直る。アリエスは腕を組み、つまらなそうにあなたを見下ろしていた。

（この人と、真実の恋を？ ロマン스를？）

どう考えても、この鍛錬場にそんなものの欠片もない。恋愛など「弱者のすること」と切り捨てた男。あなたを「力の増幅装置」としてしか見ていない男。そんな相手と、どうやって恋に落ちろというのか。あなたは木剣を拾い上げながら、こっそりため息をついた。

（まあ、やるしかないか――）

こうして、あなたの神様との契約結婚が始まった。最初の相手は、天空で最も恋愛から遠い男――戦神アリエス。

模擬戦の日々が、幕を開ける。

【序章了】

第1章「衝動の目覚め」

古傷への接触

それからの日々は、模擬戦に次ぐ模擬戦。恋愛においてはかけらもなく、ひたすら走り込みと剣の打ち合いが続いた。

もはやルーティンになってしまった今日の訓練が終わった直後だった。

打ち据えられた木剣を手放し、土にまみれた床に膝をつくあなたに、アリエスはいつものように「続けるぞ」と言いかけて——ふと、動きを止めた。右腕に滲む血。古い傷が開き、手甲の下から赤い筋が滴っている。

「血が……!」

あなたが駆け寄り、ハンカチを取り出す。彼は「かすり傷だ」と遮ろうとしたが、あなたは構わず彼の腕に手を伸ばした。

「待て、触るな——」

アリエスの声が、わずかに上ずる。戦場で命令を下す時のような低い声ではなく、まるで——怯えているような響きだった。

「手当てをしないと。鎧、外せますか？」

「……必要ない」

「あります。見せてください」

あなたが真っ直ぐに彼の紅い瞳を見つめると、アリエスはしばらく押し黙り、それから観念したように戦鎧の留め金を外した。肩当てが外れ、胸当てが緩められ、右腕の下に着ていた薄布が露わになる。そこには血が滲んで、布を赤黒く染めていた。

「……布を、捲りますね」

「……」

あなたの指先が彼の素肌に触れた瞬間、アリエスの身体がびくりと震えた。戦斧を振るう腕とは思えないほど、その震えはかすかで、まるで傷ついた獣のようだった。

現れた傷は古く、何度も開いては塞がった痕があった。きちんと手当てをせず、無理に戦い続けたせいだろう。傷口は赤く腫れ、まだ新しい血が滲み出ている。

「消毒します。少ししみますよ」

「……ありがとう。だが、痛いのは慣れている」

でも、とあなたは思う。慣れているのは戦場で負う痛みであって、誰かに傷を触られる痛みではないはずだ。

あなたが消毒液を染み込ませた布を傷口に当てると、アリエスは奥歯を噛み締めた。しみる――戦斧で斬られるより、矢が刺さるより、よほど鋭い痛みが走る。それは傷そのものの痛みではなく、誰かに傷を見られているという、生まれて初めての感覚だった。

（この人、怖がっている――？）

あなたは気づいた。アリエスの肩が、かすかに震えている。戦場で死線を越えてきた戦神が、たった一枚の消毒布を前に、まるで傷ついた獣のように身を強張らせている。身体を晒すことが、これまでほどに怖いのだろうか。傷を見せることが、これまでほどに心を削るのだろうか。

（ずっと、ひとりで戦ってきたんだ）

誰にも見せず、誰にも癒されず。傷は塞がるのを待つだけ。痛みは耐えるだけ。そうやって、この人は今日まで生きてきたんだ――そう思ったら、あなたの指は自然と、もっとやさしくなっていた。

「……お前は」

アリエスが絞り出すように言った。

「俺の傷を見て、怖くないのか」

「怖くないです」

あなたは即答した。その声に嘘はなく、あなたはただ黙々と、清潔な包帯を巻いていく。アリエスは何かを言いかけて、やめた。怖くないのか、と聞いた自分が、一番怖がっていることを、あなたに見抜かれたくなかったから。

「……お前は、変わってるな」

やがて絞り出すように呟かれたその声は、戦場の鬼神のものとは思えないほど、静かで、

かすれていた。

あなたが包帯を巻き終え、「これでよし」と顔を上げると、アリエスは慌てたように視線を外した。あなたの指の温かさが、まだ彼の腕に残っている。

「あの、アリエスさん——」

「……今日はもういい。下がれ」

彼は背を向け、鎧を手早く身につける。その背中からは、あなたを追いつ返すにはあまりにも強張っていて、まるでこれ以上いると、自分がどうにかなくなってしまうと言っているようだった。

「下がれって言っても、ダメです」

あなたは一歩、彼に近づいた。

「……ん？」

「全部、治療しないと。その腕だけじゃないですよ。背中も、肩も、きつと他にも——」

「必要ないと言った」

「あります」

あなたは引き下がらなかった。怖い。本当は怖い。戦神を怒らせたらどうなるか、考えただけで足が震える。でも——ここで引いたら、この人はきつと、一生ひとりで傷を抱えたままなんだ。そう思ったら、どうしても引けなかった。

「……部屋に行きます。今すぐ。私が手当てします」

「お前——」

「ダメですか」

真っ直ぐに見上げるあなたの瞳に、アリエスは何かを言いかけて——やめた。ため息とも唸りともつかない声を漏らし、彼は背を向けて歩き出す。その歩みは遅く、あなたがついてくるのを確かめるようだった。

|

鍛錬場からアリエスの私室までは、ほんの数分の距離だった。でもあなたには、それが永遠のように感じられた。無言で歩く彼の背中は大きくて、遠くて、時折、自分のしていることが無謀すぎるのではないかと冷や汗が流れた。

それでも、あなたは彼の部屋に入った。

扉が閉まると、アリエスはしばらくあなたに背を向けたまま立ち尽くしていた。それか

ら観念したように、戦鎧の留め具をひとつずつ外し始める。肩当てが外れ、胸当てが床に落ち、下に着ていた薄布も取り去られて――戦神の素肌が露わになる。

あなたは息を呑んだ。

鍛え抜かれた身体には、無数の古傷が刻まれていた。切り傷、刺し傷、矢傷。肩から胸へかけて走る引き摺れた痕、脇腹の深い傷跡、腕の無数の細かい傷。そして背中には――ひとりでは決して手当てできなかつたであろう、ざっくりと裂けた古傷が、何本も走っていた。

「……傷跡に驚いたか」

アリエスはあなたに背を向けたまま、低く言った。その声はいつもよりずっと静かで、掠れていた。戦場の鬼神が、たった一人の人間の前で、すべてを晒している。

「お前が、どうしてもと言うから見せた。……これが俺の身体だ。戦場で刻まれた、俺のすべてだ」

あなたは、言葉を失った。こんなにも傷だらけの身体で、彼は今日までずっと、ひとりで戦ってきたのか。誰にも見せず、誰にも癒されず、ただ戦斧を振るい続けて。

「……触りますね」

あなたがそつと手を伸ばし、彼の背中にある古い傷跡に指を触れる。ひくり、と筋肉が波打った。傷口を消毒液でなざると、彼の背中が強張る。しみるのだろうか、小さく息を呑む音が聞こえた。

「痛いですか」

「……平気だ」

その声はかすかに震えていて、背中に触れたあなたの指先に、彼の筋肉がひくりと反応する。強がっているのだと、すぐにわかった。でもそれだけじゃない——触れるたび、彼

の肩が強張り、拳がぎゅっと握りしめられる。痛みをこらえているのか、それとも、別の何かに耐えているのか。戦場で誰にも触れさせなかった場所を、今、あなたの指がなぞっている。彼は怖がっているようにも見えた。でも――振りほどこうとはしなかった。

「あなた、背中にもこんなに傷があるのに、誰にも手当てしてもらわなかったんですか」

「……俺は戦神だ。傷の手当てくらい、自分で――」

「できてないじゃないですか。こんなに残ってる」

あなたの声が震えていた。怒っているのか、悲しんでいるのか、自分でもわからない。でも、その震えがアリエスの背中に伝わった瞬間、彼の強張りが、ほんの少しだけ緩んだ気がした。

「……お前は」

アリエスがぼつりと言った。

「本当に変わってるな。俺の傷を見て、よくそんな顔ができる」

「どんな顔？」

「……悲しそうな顔だ」

彼は振り返らずに言った。でもその声は、さっきよりもずっと柔らかかった。

あなたは何も答えず、ただ彼の背中の傷をひとつひとつ、丁寧に手当てしていった。時折、消毒液がしみるたびに彼の筋肉が波打ち、あなたの指が傷跡をなぞるたびに、背中がかすかに震える。あなたに触れられている間、彼は身じろぎひとつしなかった。逃げようとも、強がろうともせず、ただ静かに目を閉じて——まるで、あなたの指の感触を、ひとつ残らず覚えようとしているかのように。戦場の鬼神が、今はただ、あなたの手のひらに身を預けている。その背中が、かすかに、でも確かに、あなたに許されているように見えた。

「……これで全部です」

あなたが包帯を巻き終え、手を離す。アリエスはしばらくそのまま動かなかった。それからゆつくりと、あなたに向き直る。その紅い瞳が、星明かりを受けて揺れていた。そこにはもう、戦場の鬼神の面影はなかった。

「……ありがとう」

「いいです。どうせ私が勝手にやったことですから」

あなたが少しだけ笑うと、アリエスは何かを言いかけて、やめた。その代わりに、彼は床に落ちていたあなたのハンカチを拾い上げ、じっと見つめる。血を拭った白い布。あなたが差し出してくれたもの。

「……これは」

「差し上げます。次に傷が開いたら、これで拭いてください」

「俺は——」

「返さなくていいです。私からの、契約のしるしです」

アリエスはハンカチを握りしめたまま、動かなくなった。戦斧を握る手が、今は一枚の白い布を、壊さないように、失くさないように、ただ握りしめている。

「……下がつていいぞ」

彼は三度、同じ言葉を口にした。でもそれは、最初の「下がれ」とはまったく違う響きだった。追いつための言葉ではなく、これ以上いると、自分がどうにかなってしまう——そんなふうに聞こえた。

去り際にあなたが振り返ると、彼はまだハンカチを見つめていた。その横顔は、あなたが今まで見た誰よりも、孤独で——そして、誰よりもやさしかった。

ヒロインの葛藤／＼なんであの人なんだろう／＼

——自分の宮に戻ったあなたは、寝台に腰を下ろして、右手の星紋を見つめていた。

（私は、どうしてこんなに必死なんだろう）

アリエスは確かに怖い。戦斧を振るう姿も、紅い瞳で睨まれることも、正直、心臓が縮み上がる思いだ。それなのに、あなたは彼のそばを離れたくなかった。

（あの人、傷だらけだった。戦場で怪我をするのは当たり前なんだろうけど——誰も、手当てしてあげないのかな）

戦神だから。強者のすることだ。弱者のすることだ。そう言って、彼はすべてを一人で抱え込んでいる。痛くないふりをして、傷ついていないふりをして——まるで、誰かに頼ることを、最初から諦めているみたいに。

(……私と、同じだ)

あなたは、人に頼るのが下手だった。弱音を吐くくらいなら、一人で全部やったほうが楽だと思って生きてきた。誰かに「大丈夫？」と聞かれるたびに「大丈夫です」と笑って、心配されることすら申し訳なくて遠ざけてきた。

(だから、放っておけなかったのかもしれない)

あの人の、あの傷を。あの人の、あの孤独を。自分と重ねてしまったから。

(でも——だからって、私に何ができるんだろう)

戦えるわけでもない。力になれるわけでもない。ただの社会人で、運動だって学生時代以来の普通の人間で。そんな自分が、戦神の何になれるというのか。

——それでも。

（明日も、鍛錬場に行こう）

あなたは星紋をぎゅつと握りしめた。理由はうまく説明できない。でも、あの人のそばにいと、自分も少しだけ、戦える気がするのだ。

（私、変われないかな。戦えないままでも、せめて——誰かを守れるくらいには）

傷の手当てと、はじめての感情

【アリエス視点】

その夜、アリエスは自室の寝台に腰を下ろしたまま、じっと右手を見つめていた。

戦斧を握る手。幾千の敵を屠ってきた手。その手首に、あなたが巻いた白いハンカチがまだ残っている。解こうとして、やめる。解いたら、あの指の感触まで消えてしまいそうで。

（……眠れない。身体の奥で、名前も知らない何かがぐずぐずと渦を巻いている）

鎧の留め金を外し、胸元をはだけさせるが、熱は収まらない。それどころか、下腹部にまで熱が降りてきていることに気づいて、彼は息を詰めた。

（なぜ、こんなに今日は暑いんだ。じっとりとしていて、寝付けない。いや——暑さのせいじゃない。これは、もっと別の——）

下肢の中心が、ズボンの布を押し上げるほどに硬く張り詰めている。戦場での昂奮とも、敵を屠る前の高揚とも、まったく違う種類の熱だった。

（なんなんだ、これは……こんなことは、知らない）

「……くそ」

アリエスは右手を見下ろした。戦斧を握る手。幾千の敵を屠ってきた手。その手が今、自分の意思に反して、少しずつ下腹部へと伸びていく。震えている。こんな手の震えは、初めて戦場に立った日以来だった。

（俺の手が、勝手に——♡ いや、違う。これは、お前が——）

不意に、脳裏をよぎったのはあなたの顔だった。傷口をなぞったあの時の、痛そうに眉をひそめた横顔。その細い指が、俺の手首をつかんで、ここへ——ここへ導いたんだ。

（お前が俺の手を取って、ここに導いたんだ。そうだろう。お前が触れたから、俺は——こんなことに）

指先が布越しに自分自身に触れる。びくり、と腰が跳ねた。

（なんだ、この感覚は……）

触れただけで、頭の奥が白くかすむような快感が走る。こんな感覚は知らない。知らないのに、もっと触れたいと身体が叫んでいる。

（まるで、お前の指が——あの、やわらかい指が、まだここに残っているみたいだ。傷口じゃない、別の場所にまで、お前の指が——）

彼は歯を食いしばり、ズボンの前を寛げた。

現れた自身の昂ぶりに、彼はしばし言葉を失った。

太く脈打つ肉棒は、すでに赤黒く膨張し、亀頭の先端からは透明な先走りが滲み出ている。青黒い血管が網の目状に浮き上がり、熱を帯びて脈打っていた。

（こんなことになるのか……俺は。俺の身体が、俺の知らないうちに、こんなことに。お前が——お前が俺をこうしたんだ）

彼は恐る恐る、それを握り込んだ。

戦斧を握るようにはいかない。強すぎれば痛みが走り、弱すぎればもどかしさが募るだけだ。

（どうすればいい——わからない。誰も、こんなこと、教えてくれなかった。教えられるのは——お前だけだ）

手探りで、息を乱しながら、右手を動かし始める。指先でカリ首の溝をなぞり、親指で

尿道口を軽く押す。そのたびに、背筋を電流のような快感が駆け抜け、腰の奥がじんと痺れた。

（あの指だ——）

脇の裏に浮かぶのは、あなたの指だった。傷口をなぞった、やわらかい指先。血を拭いたハンカチの白。あの時、もっと触れてほしいと思った自分がいたことを、彼は今、否応なく自覚させられる。

（お前が——お前が今、ここで笑いながら、俺のここを指でなぞったら、どうなる？♡）

妄想の中で、あなたが微笑んでいる。その細い指が、おそろおそろ、それでいて好奇心に輝く目で、彼のペニスに伸びてくる。傷を手当てする時と同じ、やさしい手つきで、亀頭の先端を指の腹でそつとなぞる——

「……っ、は……あ、♡」

（そんなはずがない——わかっている。お前がそんなことをするはずがない。なのに、想像が、止まらない——♡）

彼は自分の指をあなたの指だと見立て、亀頭の先端を親指でくりくりと捏ね回す。尿道の奥がきゅうつと疼き、我慢できない尿意にも似た快感がじわじわと下腹部に広がっていく。

（お前の指は、あんなに細くて、やわらかくて——♡ そんな指で、俺のここを、こんなふうにされたら——）

（もし、これがお前の手だったら。もし、お前が俺のここを握って——そのまま俺を見上げたら——）

「……っ、は……あ、♡」

手の動きが早くなる。根元から亀頭までを往復するたび、先走りが潤滑油となり、卑猥

な水音が静かな部屋に響く。ぐちゅ、ぐちゅ、という粘ついた音が、自分の手から生まれている。

（お前に——見られたい）

ふと、その考えが頭をよぎった瞬間、彼は息を吞んだ。

（こんな姿をお前に見られたら——終わる。戦神も、誇りも、何もかも。見られたら終わる——なのに）

手の動きが、止まらない。

（見られたいと思っている。お前に——今のお前の目の前で、俺がこんなふうに分を扱っているところを、お前に見られたい——♡）

その倒錯的な想像に、ペニスがビクンと跳ね、先端から新たな先走りがとろりと滲み出

た。怖い。見られたら嫌われるに決まっている。気持ち悪いと思うに決まっている。それなのに——その嫌われた顔すら想像すると、興奮で腰の奥が痺れた。

（もし、お前が怖がらなかったら？　もし、お前がその指で——俺のここに、触れてくれたら——？♡）

玉袋を軽く揉みしだくと、奥から熱い疼きが込み上げてきた。腹筋が硬く収縮し、腰が勝手に浮き上がる。

（この手は——お前だけのものにしてもいい）

（お前の指が、誰か別の男に触れるくらいなら——）

その想像に、胸の奥がぎりつと締め付けられる。嫉妬。そんな感情すら、彼にとっては初めてだった。誰かに執着したことも、誰かを独占したいと思ったこともない。なのに——あなたの指が、自分ではない誰かの身体に触れる想像をしただけで、腹の底から黒い炎が

噴き上がる。

「……く、う……ッ♡」

（お前が、俺をこんなふうにしたんだ。俺を——俺の身体を、俺の心を、めっちゃくちゃにして——それで、知らん顔か）

（責任を、取ってほしい）

（お前が俺を変えたのなら——最後まで、俺を見届けろ）

限界は、突然だった。

尿道が膨張し、熱い塊が駆け上がる予感。心臓の鼓動がペニスと同期して激しくなる。足の指がピンと伸び、背中を丸め、彼は戦斧を振り下ろす時よりもずっと必死な力で自分自身を握りしめた。

（あ、いく——お前のせいで——お前の指で——お前に、こんなふうにされて——♡）

絶頂の瞬間——喉の奥から、自分でも聞いたことのない声が漏れた。

「……あ、く……ッ、ん……ああ……ッ♡」

かすれて、震えて、それでいて切実な声。戦神アリエスのものとは思えない、ただの男の声。ビュルルツと勢いよく白濁が噴き出し、彼の手と腹筋を熱い飛沫が汚していく。ドクドクと何度も脈打ち、残りの精液を搾り出すように、腰が小さく跳ね続けた。

（お前に——お前に、この精を——♡ お前が、受け止めてくれたら——♡♡）

「は……っ、はあ……っ」

荒い息だけが暗い部屋に響く。

しばらく動けなかった。右手はまだ自分自身を握ったままだ。指も腹も、証拠のぬめりで濡れている。全身から力が抜け、心地よい疲労感と——それと同時に、どうしようもない動揺が胸を締め付ける。

（こんな姿を、もしお前に見られたら——お前は、なんて言うんだ。気持ち悪いと思うか。それとも——いや、見られるわけにはいかない。絶対に、知られてはいけない）

想像しただけで、ぞっとする。だが同時に、その想像だけで、萎えかけた自身がまたかすかに脈打つのかを感じて、彼は奥歯を噛み締めた。

（俺は、何を考えているんだ。自分の手でこんなことをして、その上、お前に見られる想像までして——最低だ）

「……違う」

闇に向かって、彼は呟いた。

「これは、違う。お前のせいだ」

何が違うのか。何がお前のせいなのか。それすら言葉にできなかった。彼が知っているのはただ——あなたの指の感触と、その夜ひとりで味わった、戦いとも勝利とも違う種類の衝動だけだった。そして、それを与えたのは、間違いなくあなただった。

（お前が——俺を変えた。ならば、最後まで、俺を見届けろ）

アリエスはゆっくりと起き上がり、汚れた手を見下ろした。右手の甲で、星紋がまだかすかに輝いている。あなたと同じ星紋。あなたと繋がっている証。

（お前といると——調子が狂う。それどころか、お前に支配されている）

初めて、彼はそう思った。戦場で培った冷静も、鍛え上げた自制心も、あなたの前では脆

くも崩れ去る。なのに——その崩れる感覚を、不快とは思えなかった。あるのはただ、名前をつけられない感情と、もう一度お前に触れたいという、どうしようもない渇きだけだった。

（俺は、こんなにも誰かに触れたいと思っただけじゃない。誰かに触れられたいと思っただけでもない。誰かのものになりたいと思っただけでもない。なのに——なぜ、お前なんだ）

荒い息が、ようやく静まった。

自室の寝台に腰を下ろしたまま、アリエスはじつと右手を見つめていた。先ほどまで自分自身を握りしめていた手。お前の指を思い出しながら、どうしようもなく汚した手。証拠のぬめりが、指のあいだにまだ残っている。

（……最低だ）

彼はゆっくりと起き上がり、手拭いで指を拭いた。戦場で血を拭う時と同じ動作。だが、

これは血ではない。お前への欲望の残滓だ。拭いながら、彼は奥歯を噛み締めた。

その時だった。

寝台から身を起こそうとした拍子に、手首に巻かれたままだった白いハンカチがはらりと床に落ちた。あなたが巻いてくれたハンカチ。解こうとして、やめていたもの――ずっとそこにあったそれが、ようやく離れたのだ。

咄嗟に、彼はそれを掴んだ。

戦場で敵の矢を素手で掴むよりも、ずっと速く、ずっと必死に。自分でも驚くほどの反射速度だった。

(……なんで、こんなものを)

彼はハンカチをじっと見つめた。白い布には、自分の血が茶色く変色して染みついている。洗っても落ちないだろう。ただの汚れた布切れだ。こんなものを持っても仕方ない。

ない。捨てるべきだ。そう思う。頭ではわかっている。なのに――

指が、離せなかった。

（これをくれた時の――お前の顔）

傷口をなぞりながら、痛そうに眉を寄せていた横顔。血を拭いながら、ほんとと少しだけ緩んだ口元。そして、最後に見せた、かすかな笑み――戦場で誰も彼に向けたことのない、やわらかい表情。

（それを思い出すだけで――身体が、熱くなる）

彼はハンカチをそっと鼻先に近づけた。戦場の鉄と血の匂いに混じって、かすかに残るお前の匂い。指先に残っていたのだろうか、甘いような、やわらかいような――言葉にできない、お前だけの気配。

(洗ってしまったら——お前が消える)

(この血も、もう俺だけのものじゃない。お前が拭った血だ。だからこれは——捨てられない)

彼はハンカチを丁寧に折り畳んだ。戦斧を握る手が、今はたった一枚の布を、壊さないように、失くさないように、ただ折り畳んでいる。それから、寛げた胸元の布の奥——心臓の真上にあたる場所に、そっとしまい込んだ。

(ここに、置いておく。お前の温かさを、お前のやさしさを、この布と一緒に——俺の一番近くに。まるで、お前自身を抱いているみたいに)

手を当てると、かすかに布の感触が胸に伝わる。心臓の鼓動が、その布越しに手のひらに響いているようだった。

(これは、俺のものだ)

（誰にも渡さない。お前にも——いいや、お前には、いつか返すかもしれない。その時は——もっと別のものを、俺にくれ）

ふと、そう思った。

その理由を、彼はまだ知らない。ただ、この布だけは——誰にも渡せない。それだけは、確かだった。

彼は深く息を吐き、寝台に横たわった。胸の上で、ハンカチがかすかに温かい。まるで、お前の指がまだそこにあるかのように。

（こんな夜が、これからも続くのだろうか）

（お前に触れたいと思うたびに、俺は——自分を抑えきれなくなるのだろうか）

（それでも、お前に触れたいと思うことを、俺はもう、止められそうにない）

（それどころか——いずれ俺は、手を伸ばす。お前の指だけじゃなく、お前のすべてに）

闇の中、彼はハンカチをしまった胸のあたりにそっと手を当てた。戦場の鉄と血の匂いに混じって、あなたの指に残っていたかすかな匂いが、まだ消えずにそこにあった。

（お前が、俺を変えた）

（お前が、俺を支配した）

（お前が——俺の、はじめてのすべてを、奪ったんだ）

（だから、責任を取れ）

（最後まで——俺を見届けろ。お前のせいで、こんなふうになった俺の前から、どうか、い

なくならないでくれ)

それが、戦神アリエスが生まれて初めて「自分のもの」だと強く認識した瞬間であり――
同時に、自分が「あなたのもの」になってしまったことを、無自覚のうちに受け入れた瞬間
でもあった。

アリエスの日記 一

今日、契約者と手合わせをした。木剣もまともに握れぬくせに、諦めずに向かってきた。

手当てをされた。戦場で傷を気にされたことなど一度もなかった。あんなふうに触れられるのは、慣れん。

渡された布をどうすればいいのかわからず、鎧の内側にしまった。



あいつは、俺の傷を心配した。怖がっているくせに、逃げなかった。
あの目は、何かに飢えている目だった。

戦場で、死線を越える前の、生きたいと願う者の目に似ている。

あいつは、何かと戦っているのか。
だとしたら——俺と同じだ。

——これは、なんなんだ。

